

次の文章は、昨年のノーベル賞受賞者として二人の日本人(大村智さんと梶田隆章さん)が選出されたことを受け、ある新聞社が座談会を開いた時のものである。座談会には、吉川弘之さん[科学技術振興機構特別顧問(元東京大学総長)]と毛利衛さん[日本科学未来館館長(宇宙飛行士)]の両氏が参加した。司会者の質問に答える形で対談し、業績の意義を語り合っている。文章を読んで、問いに答えなさい。

司会者 若い研究者にどんな影響があるでしょうか。

毛利 お二人とも研究成果を社会に還元しようという意思があり、すごい影響力がある。ニュートリノ(*注1)のわからないこと、宇宙のわからないことを、面白いことだと思い、挑戦しようという人が出てくるのではないかな。

吉川 若者にも大人にも言いたいのが、何が不思議か、何がわからないかを感じたとき、それを知ろうとすることが研究になる。不思議だと思っていることが集約してできた科学が人の役に立つ。

司会者 若者たちに好奇心を持ってもらうきっかけを与えるためには？

毛利 研究者がなにかを発見してワクワクしている姿をみると、子どもは面白いと思うだろう。自意識がでる中学生や高校生のとき、能力と個性と、人類がこういうことで将来につながっていると納得できれば、面白いことをしたいということにつながっていくのではないかな。

司会者 大人、先輩がそこを示すと。

吉川 若者に自由な好奇心を持つ環境を。制限をしたら、独創的な成果は出ない。大村さんも今回の梶田さん(*注2)も、20年も30年も、自分のやりたいことを究めて受賞されている。だから、いまの大人の責任は、子どもたちのためにそのような科学に取り組む環境を整えることです。ここでしっかりと子どもが科学に取り組める環境を残してやる。その点を、今回の大村さんや梶田さんの受賞をきっかけにじっくり考えた方がいいと思います。

毛利 ずいぶん、ノーベル賞で社会が沸き立っているが、ノーベル賞をもらうことがすべての価値を決めるという考え方に陥ってはいませんか。湯川さん(*注3)がノーベル賞をとったときと同じ発想で喜んでいる時代ではないんですね。ノーベル賞自身も社会とともにかかわってきている。一人の力ではなくて、チームでしないと大きな発見ができないという時代にさしかかっているんですね。

司会者 梶田さんらの成果は、個人の発想・好奇心でもあるが、それを示すためには全体、チームでやらなければならないという、両方をもっています。

毛利 チームとしてのつながりの研究という戦略も、これから日本は考えていく必要があると思いますね。

*注1 ニュートリノ:物理学の研究対象。

*注2 梶田さん:2015年、チームとしてニュートリノを研究し、ノーベル賞を受賞。

*注3 湯川さん:1949年、個人の研究理論で、日本人初のノーベル賞を受賞。

【出典 朝日新聞:平成27年10月7日(水)付け朝刊記事の後半部分より抜粋】

問1 吉川さんが「研究」と「科学」との関係性について述べた内容の説明として最も適切なものを次のア～ウから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア よくわかっていることを積み重ねて、その延長線上にあるのが科学であり、研究とは、その積み重ねの技術として欠かせないものであるということ。
- イ 不思議なことに対しても、すでにわかっていることに対しても、公平な立場で臨み、違いを確かめるのが研究であり、その分析が科学であるということ。
- ウ 不思議なものや理解できないものに対して、知識欲をもって知ろうと試みるのが研究であり、その集積としての姿そのものが科学であるということ。

問2 下線部「梶田さんらの成果は、個人の発想・好奇心でもあるが、それを示すためには全体、チームでやらなければならないという、両方をもっています。」とあるが、物事への取り組みの成果を上げるためにはどのようなことが必要ですか。[条件]に従って、400字以内で、あなたの考えを述べなさい。なお、解答にあたっては、最初を1マスあけずに詰めて書き始め、段落分けをしないこと。また「、」や「。」も1マス使いなさい。

- [条件]
- 1 個人 と チーム の二つの言葉を必ず用いること。
 - 2 あなた自身の経験をふまえ、具体的な例を挙げること。